

京都大学	博士(文学)	氏名	田 中 秀 樹
論文題目	近世東アジアの政治文化 —— 朱子学を中心に ——		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は論者が東アジア近世とする時代に即して、主にそこでの政治思想と学術がどのようなものであったかを論じたものである。考察の対象はとくに、12・13世紀に生きた朱子その人と宋代士大夫たちとの政治思想、および18世紀乾隆年間の清朝と江戸期日本の尾張藩における学術情況の二点にしぼられる。「序章」では政治文化という言葉を用いる理由を説明するとともに、本論文のねらいを述べる。</p> <p>第一章「宋代道学士大夫の“狂”者曾點への憧れ —— 朱熹とその弟子との問答を中心にして ——」は、『論語』や『孟子』に登場する曾點を朱子ら南宋の人々がどのように評価していたのかを論じたものである。従来の研究では、朱子は宋代士大夫たちが曾點について議論することに批判的であったとされ、また朱子にとって曾點という存在は陸九淵とともに全否定の対象であったとされることがあった。論者はまず朱子の曾點観を再検討し、朱子にとって曾點は決して全否定の対象ではなかったこと、朱子学において曾點にマイナスイメージが伴うに至ったのは、陸九淵の学との対抗を迫られた朱子の弟子たちによってこれが強調され、生み出されたものに過ぎないことを明らかにする。さらに南宋においてなぜ多くの学者が曾點に憧れたのか、ということについて考察し、それは「隠」への憧れと、経世の自任という相矛盾する志向を持つ当時の士大夫が、それを矛盾ではなく整合的に体现している人物として曾點を発見し、そこに自己の理想像を作り上げていたからであると論ずる。</p> <p>第二章「朱子の「心は性情を統ぶ」解釈の一側面 —— メタファーとしての官僚制 ——」では、朱子学の主要概念の一つである「心は性情を統ぶ」について論ずる。朱子は自己の哲学的世界を説明する時に、しばしば比喩を用いた。論者は朱子が「心は性情を統ぶ」の「統」を「統攝」と言い換えている事例を取りあげつつ、「統攝」という言葉が宋代にあっては官界でも用いられたこと、宋代の官僚たちにとってこの語は、日々の文書行政や統治の基本理念を連想させるものであったとする。そして朱子が「心は性情を統攝する」と言ったとき、それは心の動きを行政の動きにたとえたものであったとする。</p> <p>第三章「朱子学的君主論 —— 主宰としての心 ——」は、著名な中国思想史研究者である余英時による議論に疑問を感じたところから生まれたものである。余英時は宋代士大夫によってなされた「天下を以て己の任と為す」などの言説から、彼らは君主を上に乗るもの自らを政治的な主体として意識していたと見なし、これを宋代における政治文化の特徴であるとした。そして士大夫が目指したのが「君権を抑制して、士</p>			

権を伸張する」こと、すなわち皇帝権力をつとめて縮小させ、権力を士大夫につとめて委任させてしまうことであったと論じた。論者は宋代士大夫がそのような志向を一方で持っていたことは認めつつも、他方で朱子学がその後にあるのは皇帝独裁を擁護する政治理論ともなりえた点から見て疑問であるとする。論者が着目するのは、中国の政治論でしばしば用いられたのが君主を元首つまり頭とし臣下を股肱つまり手足とする比喻であったのに対して、朱子の場合は君主を心とし、この心が耳目など身体の諸器官を主宰するという比喻を用いたことである。朱子学では心の修養がとくに重視される。朱子は主観として独断的な君主権力の行使を当然認めないものの、君主と国家とを心と身体とのアナロジーで説明したことは、一面で君主が「心」と同様に厳然たる命令主体として臣下や国家を統率することを可能としたとする。朱子にとって正しく機能する君主とは、身体における「心」同様にいかなる組織・機関にも拘束されることのない自由無礙なる存在であって、彼が理想とする君主とは、「象徴」でも「虚君」でもなかったと結論づける。

第四章「宋代経筵講義における『陸宣公奏議』の読まれ方」では、宋代士大夫が名君たれと皇帝に対してなした要請と、それに対する皇帝の反応について、南宋の孝宗の事例を取りあげて論ずる。論者は宋代に経筵という皇帝教育の場において、唐代の宰相陸贄の『陸宣公奏議』がテキストとして読まれていたことに注目する。士大夫が臣下として「忠」の精神を涵養するために、この書が近世社会において広く読まれてきたことはこれまでも知られていた。だが、宋代においてはそれだけでなく、君主たる皇帝の読むべき書物としても重要視されていたことは、あまり言及されてこなかった。その顕著な事例の一つが孝宗朝における経筵講義である。士大夫側の意図は『陸宣公奏議』をテキストとすることによって、孝宗に対して唐代の暗君徳宗を反面教師として示し、唐の名君太宗を手本として学ばせることにあった。これを孝宗朝の政治的情況に照らして理解すれば、唐の徳宗を語ることは側近政治を展開する孝宗その人に対する痛烈な政治批判を意味していた。一方で皇帝孝宗が『陸宣公奏議』をテキストとしたことは、士大夫に対して彼らの批判を謙虚に受け入れているという名君を演ずることであつたばかりでなく、隠然たる力を持ち続ける父帝太上皇（高宗）に向けられた演出でもあったとする。

第五章「十八世紀後半、尾張藩儒石川香山と岡田新川」は、前章に続いて陸贄『陸宣公全集』（『陸宣公奏議』）がどのように読まれたのかを問う。なかでも『陸宣公全集』の浩瀚な注釈が登場した18世紀に注目する。本章では、まずその一つである『陸宣公全集釈義』を著した江戸期日本の尾張藩儒石川香山を取り上げ、これまでほとんど論じられることのなかった彼の生涯と思想について詳細に論ずる。また彼の思想的特徴を明確にするために、比較の対象として尾張藩においてともに生きた岡田新川の生涯と思想をも詳細に跡づける。

第六章「石川香山『陸宣公全集釈義』と十八世紀後半における名古屋の古代学」で

は、石川香山『陸宣公全集釈義』が著されることとなった学術的背景とそれを可能とした要因について、18世紀後半の名古屋という現場に即して論ずる。尾張藩の学術に関するこれまでの研究では、河村秀根・益根の『書紀集解』や、律令学研究成果が現代でも通用する学問として注目されてきたが、石川香山という存在は等閑視されてきた。そこで論者は『陸宣公全集釈義』を詳細に分析し、これを完成するためには基本的な古典漢籍を渉獵博搜するとともに高度な漢学能力がなければ到底不可能であったとし、さらにこれを『書紀集解』と比較することによって、それらがともに合理的科学的な古典学に基づいていること、引用の方法や引用された漢籍の種類あるいは『康熙字典』の利用などで、両者は注釈書としてきわめて似ているとする。そして、これらの注釈書が誕生した現場をより詳細に調査し、河村家と石川香山とが緊密な関係を持って漢籍の勉強会を行っていたこと、しかもその会場が河村宅であり、使用した漢籍も河村家蔵本である可能性が高いことを発見した。以上により論者は、石川香山『陸宣公全集釈義』と河村秀根・益根『書紀集解』とが、全く同じ現場において誕生したものであることを主張する。

第七章「十八世紀後半における清朝と江戸期日本の政治文化——『陸宣公全集』注釈書の受容をめぐって——」は、『陸宣公全集』の注釈書が日本の江戸時代と中国清代という同じ18世紀後半に現れたことに着目し、日本尾張藩と清朝における政治文化の様相を比較し、その差異を明らかにする。論者は『陸宣公全集釈義』などの著者石川香山の政治思想が、尾張藩で藩政改革を指導した人見璣邑や細井平洲らのそれと共通点が多く、また『陸宣公全集』の持つ政治思想も、当時の藩政府に受容されるだけの政治的理由が十分にあったとする。これに対して清朝乾隆時代では、『陸宣公全集』に見られる政治理念は乾隆帝の抱く君臣論とはまったく相容れず、かりに士大夫がそこに見られるような君臣理念をことさら主張するようなことがあれば、弾圧の対象にもなりかねなかったことを、文字の獄の一つとして知られる尹嘉銓案の分析を通して論ずる。

「おわりに——展望、もしくは今後の課題として——」では、とくに明末の政治思想に言及できなかつたことを反省点とし、これを今後の課題とする。

(論文審査の結果の要旨)

朱子の本名は朱熹である。彼は中国南宋の時代、12世紀に生きた思想家である。朱子とはその尊称であるが、この尊称による呼び方がむしろ現在でも普通であると言ってよい。それほどに彼が後世に与えた影響は絶大であった。朱子学は中国では元代から清代に至るまで、ほぼ一貫して国家の正統学問であった。朝鮮で朱子はほとんど信仰の対象であったし、日本でも荻生徂徠らによる厳しい批判にさらされながら、幕末まで大きな影響をあたえた。このため朱子および朱子学についての研究は、ほとんど無数にあると言ってよいほどである。

本論文は12世紀における朱子その人の思想から、18世紀日本における朱子学の状況にまで及ぶという実にユニークな構成を取る。また本論文のタイトルで「政治文化」という東洋史畑で異色な言葉を用いたのは、先行する研究、すなわち著名な中国思想史研究者である余英時の著作『宋明理学と政治文化』(2004)に大きな影響を受けたからである。「序章」と「おわりに」を除いて合計七章からなるが、第三章以下が本論文の中心をなす。以下、論者による思考の展開をたどりながら、本論文の意義をいくつか挙げることにしよう。

まず第三章「朱子学的君主論—主宰としての心—」は、余英時による議論に対する疑問から生まれたものである。たとえば宋代の一士大夫が「天下の憂いに先んじて憂え、天下の楽しみに後れて楽しむ」と言ったことは、彼らの政治に対する姿勢と国家に対する責任感を語ったものとして有名である。余英時によれば、朱子たちが理想とした政治とは、有徳な君主がすべての国政を宰相以下の士大夫に委任してしまうものであった。彼はまたこのような理想的君主を「象徴的元首」と呼び「虚君」とも呼んでいる。論者はこの種の見解に半ば同意しながら疑問をも感ずる。それは、ではなぜ明清時代においては同じ朱子学が君主による専制政治を擁護する理論ともなりえたのか、なぜこのような二面性を持ちうるのかというものである。

論者が着目するのは、朱子が君主と臣下との関係を説明するにあたって、心と身体との関係をその比喻として用いている点である。朱子は心を身体の主宰者であるとする。朱子にあっては周知のとおり心の居きかた(居敬)がこの上なく重視される。修養によって心が無私正大なものとなれば、その主宰により身体の諸器官は本来はたすべき役割を正しく遂行できるとされるのであって、これこそが朱子をはじめとして宋代士大夫が君主に望むものであった。ところが心と身体のアナロジーに即して言うなら、心を正すのも心でしかありえない。そこでは心は身体に対してオールマイティーな力を発揮するのであって、この側面が現れたのが専制政治であるとする。たしかにこの説明は、宋代と明清時代とにおける朱子学と政治思想の関わりを一部ではあれ説明している。

論者が次に問題としたのは、宋代でもとくに孝宗の時代に、皇帝教育の場において唐代の宰相陸贄の『陸宣公奏議』がテキストとしてよく使われたという事実であった。

第四章はこれを論じたものである。論者によれば、士大夫側の意図するところは『陸宣公奏議』をテキストとすることによって、唐代の暗愚な君主徳宗を孝宗に反面教師として示し、痛烈な政治批判を行うというものであったが、一面で孝宗もこれをもって、士大夫および父の高宗に対して名君を演じていたとする。これは論者ならではの新見解と言ってよく、よく気がついたものと高く評価できる。

論者の視野は次に、日本の江戸時代に尾張藩の朱子学者石川香山が『陸宣公奏議』を含めて『陸宣公全集積義』という注釈書を編纂したことに及ぶ。これに関する考察が第五章、第六章および第七章である。石川香山と彼の交友関係につき徂徠学の影響を受けたあとの尾張藩での学術情況に即して、ここまで詳細に調べ上げたのは本論文が嚆矢であろうし、同じく尾張藩で編纂された『日本書紀』の注釈書『書紀集解』と『陸宣公全集積義』とに、内的な関連性があることを突き止めたのも初めてである。また中国清代で同じく『陸宣公全集』の注釈書が生まれたことと対比しつつ、18世紀日本の尾張藩ではこの書に見える政治思想が受容される素地を確かに持っていたことを証明する。この三章を書くに当たって論者が払った労苦は敬服に値するし、またこの部分は本論文の中で最も強くオリジナルを主張できるところである。

本論文は以上述べたように多くの創見に富むが、問題ももちろんある。たとえば朱子が君臣関係を心が身体を主宰するものと比喻をもって述べたことは、その政治思想が二面性を持つものとなることを一部説明しうるとしても、他の宋代士大夫による国家有機体説との比較がなければ整合性を主張しえない。日本尾張藩における学術を論じたところは、確かに論者の関心の高さを感じさせるものであるが、枝葉の部分刈り込む勇気と努力がさらに必要とされる。最も大きな問題は、中国明代の政治文化や朝鮮におけるそれがまったく今回の考察からは捨象されていることである。しかしこれらの諸問題は論者自らがおおよそ自覚しているところであるし、論者があえて「近世東アジア」という広い枠組みを取り、朱子学とは何であったかという大問題に挑戦したことに起因するのであるから、むしろその志をこそ高く評価すべきであろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2011年2月24日に調査委員3名が論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。